

## 4. 責任ある立場

## 人材の確保・育成は焦眉の課題

表2は、谷口史郎氏の技術者としての経歴である。同表でみるように、2006年4月に四国タオル技能士研究会  の会長に就任し、2008年3月までの2年間にわたり、同研究会の発展に貢献した。とくに、人材に係る問題への対応や後進の技術指導に全力を傾け、技能者の社会的地位の向上に尽力した。

表2 技術者としての経歴

年	内容
1991	国家技能検定（ジャカード織機調整作業）1級合格 四国タオル技能士研究会入会
1999	四国タオル工業組合主催「繊維中小事業者人材資質向上事業 繊維講座」修了
2000	四国タオル工業組合主催「繊維中小事業者人材資質向上事業 繊維講座」修了 「愛媛県中小企業新技術技術者研修」修了
2001	四国タオル工業組合主催「繊維中小事業者人材資質向上事業 繊維講座」修了
2002	「愛媛県中小企業新技術技術者研修」修了
2003	四国タオル工業組合主催「繊維中小事業者人材資質向上事業 繊維講座」修了 「愛媛県中小企業新技術技術者研修」修了 愛媛県技能士会会長表彰、技能士育成成功労者表彰（11月）
2004	「愛媛県中小企業新技術技術者研修」修了
2006	四国タオル技能士研究会会長就任（2006年4月～2008年3月）
2008	「職業訓練指導員講習」を修了し、1級技能士職業訓練指導員免許取得（2月） タオルマイスター認定（10月、2013年11月の更新認定をへて現在に至る）
2011	四国タオル社内技能検定委員・社内検定試験運営委員会メンバー（～現在）
2014	整経工人材育成システム策定事業のため、四国タオル工業組合入社（～2017年3月まで） 全国技能士会連合会会長表彰 整経工人材育成システム訓練指導 整経工育成用テキスト作成

注： 四国タオル工業組合は2017年1月5日付で今治タオル工業組合に名称変更し、それに合わせて四国タオル技能士研究会も今治タオル技能士会に名称変更。厳密には、2017年4月16日の技能士会第44回通常総会にて「今治タオル技能士会」に名称変更。

出典： 谷口史郎氏作成の履歴書、および今治タオル工業組合資料より作成。

タオル業界における人材に係る問題は年々重要度を増し、会長に就任後、幾度となく研究会に足を運んでは将来に向けた人材の確保と育成について勉強を重ねた。たとえば、第1回（2006年8月開催）、第2回（同年9月開催）、第3回（2007年2月開催）の愛媛県タオル製造業人材高度化研究会に出席し、おもに①タオル業界における現状・課題、および人材育成ニーズに関するアンケート調査の実施、②アンケート調査の結果・分析、③人材育成に係る教育訓練カリキュラムの策定などの議題について議論し、その成果として「教育訓練カリキュラム」の作成と人材育成モデルとしての「仕事と教科の関係」の冊子作成に協力した。

谷口氏が会長を務めた最後の年、オリムでは社長の平林氏から大西衣料(株) へ所有が代わり、経営体制が変わりつつあった。平林体制のもとで多くの新商品を世に送り出してきた時代にある変化が訪れようとしていた。

## 初代タオルマイスターに認定される

時期をほぼおなじくして、2008年10月に当時の四国タオル工業組合が設置したタオルマイスター制度の初代タオルマイスターに谷口氏が認定された。タオルマイスターは職業訓練指導員の免許取得者を必須条件として選考がおこなわれた。

職業訓練指導員は、愛媛県職業能力開発協会が主催する職業訓練の指導方法や労働関連法規、安全衛生などの計48時間の講習を修了した技能者に対して愛媛県知事から与えられる免許



叙任式にて、当時の四国タオル工業組合理事長・藤

高豊文氏（左）と谷口史郎氏（右）

であり、このとき谷口氏を含め 15 名が取得した。これら 15 名は、今後、各企業の後進の指導について模範的な役割を担うこととなった。

初代タオルマイスターには、谷口氏の他に豊田一也氏、山田克弘氏、阿部洋三氏の合計 4 名が選ばれた。

谷口氏が初代タオルマイスターに選ばれた理由は、1) 卓越した技術、2) 業界への貢献、3) 後進指導、4) 現役性、のおもに 4 つである。それぞれについて説明を加えよう(谷口氏提供資料「調書」)。

#### 1) 卓越した技術

谷口氏は、製織のみならず織機保全や調整作業など製織工程に関する一連の技術・知識を駆使し、南海タオル工場とオリムの 2 社合わせて 46 年以上にわたりタオル製造に従事し、今治のタオル工業の発展に多大な貢献を果たした。46 年という半世紀におよぶ長い時間の意味は、言葉で表す以上の深みがある。なぜなら、半世紀の間に扱う技術も市場も変化を遂げてきたからだ。

谷口氏は、シャトル織機の操作はもちろんであるが、電子ジャカード織機やレピア織機など最新の機械の操作まで汎用的能力を有しており、どんな織機も対応できる。また、高度な技術を用いて、市場ニーズの多様化に合わせたさまざまな商品開発をおこなってきた。たとえば、オリム時代に開発した「こりこりタオル」では、今治市の新商品新技術研究指導開発事業の助成対象となり、天然の異素材を使った特殊織りで作られている。また、2002 年に開催された世界最大規模の日用品雑貨展示会「NY ホームテキスタイルショー 2002 秋」(10 月 11 日～14 日開催)で谷口氏が製作にあたった同社の「ベビー用ポディータオル」が、バスソフト部門においてグランプリ(最優秀賞)を受賞した。

#### 2) 業界への貢献

技術者として 46 年以上もの間、今治のタオル製造に携わったことはもちろんであるが、1991 年に事実上廃止されたタオルの国家技能検定(織機調整)に代わる厚生労働省認定の四国タオル工業組

合社内技能検定制度（2011年11月4日大臣認定）の創設に奮闘したことは特記すべき貢献である。同制度は、2010年度のトライアル検定をへて2011年度に第1回目の検定試験が実施され、以後毎年実施されており、2016年度の第6回までに1級合格者22名、2級合格者22名をそれぞれ輩出している。

同制度の創設にあたっては、四国タオル技能士研究会、愛媛県立今治高等技術専門校、愛媛県繊維産業技術センターなどが協力して実現したものであるが、谷口氏は四国タオル技能士研究会のメンバーとしてリーダーシップを発揮し、試験問題の作成や実施方法などについて日夜協議を重ね、ようやく実現に漕ぎ着けた。同制度によって、今治タオル業界における技術水準の維持および技術の伝承がおこなわれている。

### 3) 後進指導

国家技能検定1級取得者で構成される四国タオル技能士研究会は、今治タオルの技術伝承・発展を牽引している組織である。谷口氏は、2006年4月から2008年3月まで同組織の会長を務め、技能士の育成に中心的な役割を果たした。

2011年から始まった四国タオル工業組合社内技能検定試験の運営委員として運営実施に従事すると同時に、検定委員として検定の実施推進に尽力した。谷口氏のタオル製造における真摯な姿勢は、若手技術者の模範となっており、後継者不足への対応に一石を投じている。

### 4) 現役性

2008年に初代タオルマイスターに就任したのちも、何十年もそうしてきたように毎日変わらずタオル工場で織機保全や調整にとり組んだ。それは2013年の更新認定のあとも変わらない。1991年の国家技能検定（ジャカード織機調整作業）1級取得後、それに安住することなく新たな挑戦をつづけてきた。他の織物産地の視察などを積極的におこない、タオルづくりのために技術向上を目指し、日々努力を積み重ねてきた。

タオルマイスター制度は更新制であり、谷口氏は2013年11月に更新の認定を受け、現在に至っている。そしてこの年、谷口氏は、70歳を迎えてオリムを退職し、46年7ヶ月という現役職人としてのタオル人生にひとつの区切りを付けた。

## 5. 引退後の活動

### 引退後も後進の育成・指導に邁進

谷口氏がいかに後進の育成・指導に身を粉にしてきたかを証明する出来事がある。表3は、2017年までの谷口氏の略歴をまとめたものであるが、ここにも記したように、2014年11月に谷口氏は、一般社団法人全国技能士会連合会主催の第34回全国技能士大会において、後継者の育成などに10年以上寄与し技能士会活動の功績が著しく大きいと認められる者に贈られる「全国技能士会連合会会長表彰」を受賞した。表彰式は東京のアルカディア市ヶ谷で盛大に開催された。



表彰式の際の記念写真

また、現役を退いてからも2014年9月から2017年3月まで愛媛県立高等技術専門校で初心者向けのコースで教鞭をとり、技術指導をおこなった。ほぼ素人に近い人を将来は整経工として活躍できる人材に育てるべく、指導者である谷口氏らも毎日が真剣勝負だった。

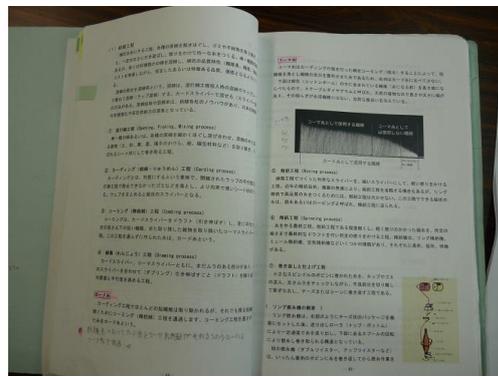
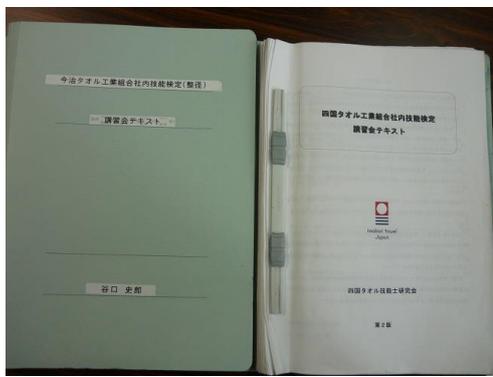
表3 谷口史郎氏の略歴

年	内容
1943	今治市馬越町で5人兄妹の末っ子として誕生
1950	今治市立日高小学校入学
1956	今治市立日高中学校入学
1959	愛媛県立今治工業高等学校入学
1962	富士インキ工業（株）入社
	3月に富士インキ工業を退社
1966	自動車免許取得
	9月に南海タオル工場入社
1969	照子氏と結婚
1973	国家技能検定2級取得
1981	南海タオル工場から渡部タオル工場に社名変更
1986	4月に渡部タオル工場閉鎖のため、5月より（株）オリム入社
1991	国家技能検定1級取得 四国タオル技能士研究会に入会
1993	補助金事業を受けて織機の罎替装置を改良し、12色罎替を製作（タオル織機では初）
1999	「繊維中小事業者人材資質向上事業 繊維講座」修了（～2003）
2000	「愛媛県中小企業新技術 技術者研修」修了（～2002）
2002	「NYホームテキスタイルショー2002秋」で谷口氏が製作にあたったオリムの「ヘビー用ポディータオル」がバスソフト部門においてグランプリ（最優秀賞）を受賞
2003	愛媛県技能士会会長表彰を受ける
2005	四国タオル技能士研究会が全国技能士会連合会会長表彰を受ける
2006	4月に四国タオル技能士研究会会長就任（～2008年3月まで）
2008	2月に職業訓練指導員の講習を修了し、3月に職業訓練指導員免許取得 10月に初代タオルマイスター認定
2010	四国タオル工業組合社内技能検定トライアル実施
2011	11月に四国タオル工業組合社内技能検定制度が厚労省の認定を受ける
2013	オリム退社
2014	整経工人材育成システム策定事業のため四国タオル工業組合に入る 全国技能士会連合会会長表彰を受ける
2016	整経工人材育成システム訓練指導に従事 整経工育成用テキスト作成に従事
2017	3月に整経工人材育成システム策定事業終了のため今治タオル工業組合を退職

注： 四国タオル工業組合は2017年1月5日付で今治タオル工業組合に名称変更。

出典： 谷口史郎氏提供資料「履歴書」より作成。

加えて、タオル業界の技能向上を目指して、2011年に四国タオル工業組合社内検定制度が設置されたが、その運営メンバーとしてリーダーシップを発揮してきた。講習会に使用されたテキスト作成においては、毎日夜遅くまで内容の吟味に明け暮れ、戦後の今治タオルの技術の集大成ともいえるテキストを完成させた。そしてその後も、タオル技能検定の検定委員として検定の実施推進に力を注ぎ、現在は今治タオル技能士会の相談役を務めている。



谷口氏が作成した整経工育成用テキスト

一方、現役引退後、趣味のスポーツや文化活動にも力が入る。毎週3日はソフトボールに精を出し、毎日曜日はボウリングに興じ、その他にもゲートボール、ドライブ、ウォーキング、山登り、滝巡りなど枚挙にいとまがない。ソフトボールでは今治市壮年ソフトボール大会で優勝経験があり、またゲートボールでも全国大会で3位になった実力を持つ。谷口氏らしく、何事も一生懸命にやるから楽しい。(次号につづく)



今治市壮年ソフトボール大会で優勝

谷口史郎氏のタオル製織技術に関するメモ書き

（１）タオル製造における技術

織機の故障は、機械のどこかの部分が完全な運動をしていないからである。すなわち、必要以上の大きい運動をしたり、必要以下の小さい運動しかしていなかったり、また運動する時期が早すぎたり遅すぎたりした場合に故障する。従って、運動の大きさと時期の調整がもっとも重要である。

故障箇所の発見は、織機の主運動、副運動、補助運動の順序で検討すると良い。なお、織機は故障してから修理するのはなく、故障を未然に防ぐことが必要であり、それにはつねに織機を保全しなければならない。保全の目的は、各種機構の性能をいつも正しい状態に保持して、織機の故障および不良な織物の発生を未然に防止し、高い品質の織物を最高速度で能率的に生産すると同時に、織機の耐用年数を増すことにある。

織機を無理なく調子良く回転させるには、まず注油、グリス、オイル交換を計画的に実施することが重要である。また、保全は重点区分（開口、緯入れ、箆打ち、送り出し、巻き取り、杼替）ごとに定期的におこなうことである。加えて、適当な時期に解体保全をすることが望ましい。織機の故障を知るには、織機の音を聞いたり、目で見たり、手で触ってみたりして各側面から総合的に判断することが必要である。

（２）タオル織機の進化

自動織機が普及する以前は、管巻機を使ってシャトルのなかにある木管に緯糸を巻き、緯糸がなくなる手前で人手によってシャトルを交換していた。やがて、緯糸がなくなる寸前に自動的に新しい木管（緯糸）に交換するコップチェンジタイプ、あるいはシャトルごと替えるシャトルチェンジタイプのいずれかの緯糸自動補給装置が登場した。その後、ルームワインダーを備えた織機が誕生し、自動

的に木管に緯糸を巻くようになった。

昭和30年代に入ると、タオル織機の自動化の研究が進み、1956年遠州織機が管替式タオル自動織機、1958年原田織機が片4丁杼タオル自動織機（シャトルチェンジ）、1960年豊田自動織機も片4丁杼タオル自動織機を相次いで発表した。これによって1960・61年頃から自動織機の導入が本格化した。

ちょうどこの時期、タオルケットの急成長と大量消費社会の到来によってタオル需要は急増したが、織機の自動化と広幅化による製造工程の省力化とコストダウンが実現し、市場の要求に応えることができ、タオル業界は大きく発展した。

こうしたタオル織機の進化は、周辺機器や設備にも影響を与えた。たとえば、タイイングマシンやドロッパー、ワープチェッカー、オートンストッパー、ユニフィルなどである。

#### 《タイイングマシン》

大変手間のかかる手作業だった経糸結びを機械化することによって織機の停台時間を短縮し、作業員の熟練が不用となり稼働率が向上した。

#### 《ドロッパーとワープチェッカー》

経糸が切れると自動的に織機が停止し、B級品の減少と省力化を実現。

#### 《オートンストッパー》

従来の織機の起動と制動は熟練の技が必要なハンドル操作だったが、ボタンひとつでできるようになり、作業が簡略化。

#### 《ユニフィル》

アメリカのリソナ社製の高性能ルームワインダーで、シャトル織機のもっとも進化した姿。緯糸のチーズをストックしておけば自動的に木管に緯糸を巻き、コップチェンジする。

以上のような織機の自動化が日に日に進んだが、昭和50年代になって大きな変化があった。レピア織機の登場によって自動織機の採用は徐々に減少しはじめ、現在はレピア織機やエアージェット織機などの革新織機に代替されている。

織機とともに進化したのがジャカードである。大きい柄や複雑な柄を製織することができるジャカード装置は、長方形のカットカード（紋紙）上に意匠図で示された各経糸に対応する点を決めておく。緯糸に対して経糸が上になる場合は、紋紙に穴を開けるカットカードからエンドレスのフィルムに穴を開けたパンチングカード（紋紙）を用いるようになった。その後、これらの紋紙を使わず電気信号（フロッピー、メモリーカード、USB）を電子ジャカードにデータを入力し、自動的に通糸を上下させる電子ジャカードに代替された。

